

# 「徒然なるままに」



## 身に染みだ台湾での親切

理事・西島太郎

（読売新聞東京本社販売局長兼  
読売新聞グループ本社社長室次長

「じじいまるご」  
1968年8月5日生まれ。家族は妻と小学6年生の息子、オスの柴犬の3人と1匹。大学時代まで弾き込んでいたピアノをまた始めた。



【表紙写真】

まるでヨーロッパの海辺の街にいるかのようなこの写真は、ミニチュアの世界。この街中に、ミニチュアとなった運動本部職員「のんちゃん」がいるのを発見できましたか？



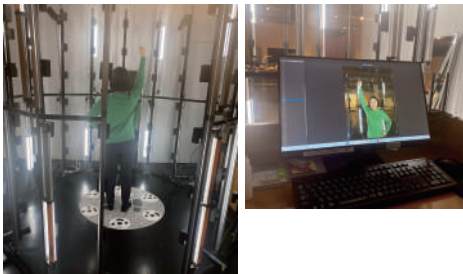
### あなたもミニチュア世界の住人に

表紙を撮影したのは東京・有明にあるミニチュアミュージアム「Small Worlds (スモールワールドズ)」。

最新鋭の3Dスキャナーを使って、自分のミニチュアフィギュアが作製できます。スモールワールドズ内にフィギュアを1年間設置できるプランがあるほか、毎月11日と22日はペットと一緒に撮影することも可能。

家族や恋人と、もちろん一人でも楽しめること間違いなし。ぜひ、皆様もお試しあれ！

(詳細は8頁をご覧ください)



「小さな親切」誌は、季刊発行  
春号・5月、夏号・8月、秋号・11月、新春号・1月の予定です

2024年5月1日発行 通巻534号

編集・発行人 鈴木恒夫

発行所 公益社団法人「小さな親切」運動本部  
〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-20-4  
TEL.03-3263-2866 FAX.03-3263-3838  
<https://www.kindness.jp/>

印刷所 広研印刷株式会社  
©無断転載禁止 落丁、乱丁はおとりかえいたします。

**新** 年早々、能登半島を中心に深刻な被害をもたらした大地震が起きた。4月には、台湾が大きな地震に見舞われた。いずれの被災地でも、大切な人を失った深い悲しみに加え、暮らしの再建に多くの方々が苦悩されている。心からお見舞いを申し上げます。

台湾は、1999年9月にも2400人以上の命を奪った大地震に襲われている。約30年に及んだ新聞記者生活では、その多くで災害報道に携わったが、四半世紀がたった今でも、台湾での現地取材を忘れられずにいる。

羽田空港からあわただしく飛行機に乗ったものの、現地の言葉も話すことができない。不安な気持ちを抱えていた機内で、年配の男性に日本語で声をかけられた。「私は台湾出身者です。これから現地に向かいます」。東京で中華料理店を営んでいるという。

**新** 聞記者だと明かすと、「手伝います。故郷の現状を世界に報じてください」と、握手を求められた。男性は、台北の空港でタクシーと交渉すると、中部の都市・台中へ一緒に向かい、大きな余震の中、翌日には震源地近くの南投県まで案内してくれた。

「お礼をさせてほしい」と懇願したが、頑なに拒まれた。「故郷のことを伝えるために、日本から来てくれたのだから、当たり前のことをしているだけ」

震源地に近い街で男性と別れた後も出会いが続いた。一人で「取材本部」を野外で設営していると、地元の方々が「南国でも夜は寒いから」と布団を貸してくれたり、子どもたちがお菓子を持ってきてくれたり。大きな災害に見舞われた人々だ。何度も丁寧にお断りしたのに、「台湾の状況を伝えてくれるあなたの手助けをするのは当然」と繰り返すばかりだった。

衛星経由で記事と写真を東京に送信し終わると、人の情けがありたく、声を殺して泣いた。被災して途方に暮れているのは、彼らだ。それでも異国の記者に次々と手を差し伸べる。親切が身に染みだ。

**悔** やんでいることがある。こうした方々に、感謝の気持ちを伝えられていない。どうしてもお礼を申し上げたい。皆さんのおかげで、助け合いの大切さ、人間の高潔さを学んだ。今も心がうずく。しかし、あの男性の名前を頼りに都内を捜したが、とうとう見つけれなかった。その後の被災地にも再訪できていない。

胸の内を先輩記者に告白すると、「受けた親切は、別の人への親切でお返しすればいい」と諭された。その言葉を支えに、「小さな親切」運動の一隅でお手伝いさせていただいている。本稿を記している現在でも、台湾では救助・捜索活動が行われ、能登半島でも震災後の対応に追われている。あの取材の日々と重ね合わせながら、被災者の方々に思いを寄せ、祈り続けている。